

アフタコロナ（2022年度以降）の新しい教育の在り方の基本方針について

2021年6月22日

教育・国際連携本部会議決定

2020年度は、コロナ禍の中、特例措置として、暫定的な形式でオンラインによる大学教育を実施してきた。2021年度も当面は、引き続き2020年度と同じような状況が続くものと想定される。新型コロナウイルス感染症が通常のインフルエンザのように認識されるアフタコロナの時期はまだ見えない状況ではあるが、新しい大学教育という視点で大きな変化があり得るとすれば2022年度以降であると考えられる。

2022年度以降においても、大学における学びや教えにおいてコロナ禍で培った様々な思い、考え方、やり方を適切に繋ぎ、発展していくことが重要である。そのため、2022年度からアフタコロナの新しい教育を実施していくことになった場合に備えて、また2022年度以降も臨機応変に改善していくことも念頭に、2022年度から開始できる仕組み（基本方針とガイドライン等）を至急、構築することが不可欠である。もちろんコロナの感染状況によっては、新しい教育の開始は2023年度以降になる、あるいは、一向に収束しないコロナ禍の中で新しい教育に徐々に移行していく可能性もあり得る。しかしながら、2022年度以降は、本学として目指すべき新しい教育の在り方の基本方針等のもとで、様々な状況に柔軟に対応していくのが合理的であろう。

文科省では、「大学等における遠隔授業の取扱いについて」（令和3年4月2日）や「教育現場におけるオンライン教育の活用」（令和3年3月29日）において、大学設置基準の特例措置（学士課程の遠隔授業の60単位上限を凍結）を2021年度も引き続き実施することが記載されている。加えて、2022年度以降のオンライン教育のために遠隔授業の明確な定義等も含めて大学設置基準の見直しを2021年度中に行うことが記載されており留意する必要がある。

一方、本学では、教育・国際連携本部において2019年度に「オンライン授業の実施のためのガイドライン（試行）」（2019年12月12日）を策定し、動画を用いたオンデマンド型の授業の単位化のための規則を試行として定めている。その方向性にも沿う形で、新たな授業形態としてのZoom等を用いた遠隔授業やコロナ禍で培われたオンライン教育に関する様々な学習環境も含めて、改めて議論することになる。

コロナ禍以前、本学での学びはキャンパスにおける対面での学びが本質であった。アフタコロナでもその本質は不変である。キャンパスを中心とした対面での学びを基本とした中に、オンラインでの全く新しい学びを組み込み、多様な学びの可能性を求めた教育を目指していく時期にきている。

そのため、別紙に示すとおり、まずは本学の正規学生を対象として、アフタコロナの新しい教育の在り方の基本方針を示す。また、本基本方針に従い、オンライン教育（特にオンライン授業）実施のためのガイドラインを別途定めるものとする。

注）アフタコロナの時期は、ソーシャルディスタンスが解除され、学生がキャンパス内でコロナ禍以前と同様に活動できるようになった時期を指す。

アフタコロナ(2022年度以降)の新しい教育の在り方の基本方針

1. オンライン教育の定義

大学での学びは、授業での学び、研究室での学び、正課外での学びの3つがある。このうち、オンライン授業とは、「科目で指定された授業の時限に教室で対面授業（大学設置基準では面接授業と呼ぶ）を実施する代わりに、授業の時限内外を問わずオンラインで学修する実施形態」のことであり、Zoom等によるライブ型と動画や音声ファイル（以下、動画等と称す）を用いたオンデマンド型の2種類、および、それらを組合せたライブ型+オンデマンド型がある。また、対面授業（以下、対面型と呼ぶ）との組み合わせの方法により、以下の2通りがある。

ハイフレックス型：ハイブリッド型ともいう。対面型とライブ型の同時実施

ブレンド型：1つの授業科目の授業ごとに、あるいは、1つの授業中で、対面型を中心に、ライブ型、オンデマンド型、ハイフレックス型を順次組み合わせる実施形態。特に、授業ごとに対面型とオンデマンド型を交互に実施する形態を、本学ではオンライン交互型、1つの授業の中で対面型とオンデマンド型を組み合わせ実施する形態をハーフ&ハーフ型という。

なお、反転授業のように、授業の時限（授業時間）外で実施する予習や復習においてオンデマンド教材を使う場合は、この定義では含めていない点に注意されたい。

表 授業の時限内における授業の実施形態の種類

授業の型		受講場所	配信場所
対面型		教室（教員と一緒にいる空間を意味する）	教室
オンライン型	ライブ型（同期型）	教室外	教室外
	オンデマンド型（非同期型）		
	ライブ型+オンデマンド型		
ハイフレックス型（並行型）	対面型+ライブ型	教室または教室外（学生が選択）	教室
ブレンド型（交互型）	対面型+ライブ型	教室（対面時）および教室外（オンライン時）	教室（対面時）および教室外（オンライン時）
	対面型+オンデマンド型 ・オンライン交互型（授業ごと） ・ハーフ&ハーフ型（授業内）		
	対面型+〇〇型+△△型+…		

※ポリコム等の遠隔講義システムを用いた同時中継型の遠隔授業はハイフレックス型に含まれる。

研究室での学びや正課外での学びも、上記の授業の実施形態と同様の形態があると考えてよく、以下では、授業での学び(予習、復習含む)、研究室での学び、正課外での学びにおいて、上記の授業の実施形態に代表されるオンラインによる教育すべてを総称して、オンライン教育と呼ぶ。

2. オンライン教育導入を前提とした基本方針

オンライン教育を組み込んだ新しい教育の基本方針を以下の2つの観点から定める。

- 1) オンライン教育の導入姿勢(どの程度オンライン教育を導入していくのかの匙加減を、教育の質保証などの留意事項とともに定める)
- 2) 新しい教育の実現方法(「どのような方針で実装していくか」に関する基本方針を決める)

オンライン教育の導入姿勢に関する基本方針

- A キャンパスや教室などで人を直接介してその場で学ぶ「対面での学び、それを実現する教え」を基本とする。
- B 多様な学びを促すオンライン教育は、
 - (a)対面での学びと同等以上の教育効果がある、あるいは、
 - (b)オンライン留学、国際共同教育やインターンシップのように、対面での学びに比して場所・時間を問わないことによる代えがたい学びの機会が得られる
と期待できる場合には、適切な教育の質保証のもとで、選択枝を広げ、学習効果をさらに上げることを目的に推奨する。
- C オンライン教育への置き換えが進むことで生じる、他の授業、研究室、正課外での学びとの干渉、教員・学生との交流などが減ることへの影響にも配慮する。
- D 上記のBの実現に向けて試行錯誤やチャレンジを促す・後押しするメッセージを発信する。

新しい教育の実現方法に関する基本方針

- A オンライン教育の質保証は、教養科目群においては各科目実施委員会、専門科目や研究室教育などにおいては学院、系・コースなど、原則、各教育組織の単位で行うものとする。特に授業の場合は、当該オンライン教育の質の確認方法についても実施前に予め確認を行うこととする。
- B 各教育組織のオンライン教育の導入割合は、必要があれば、全学レベルで調整する。
- C 全学や学院レベルで、シンポジウム等を利用してオンライン教育の Good Practice を共有する。
- D 大学として BYOD を前提としていく。
- E キャンパス内でライブ型授業等が実施できる ネットワーク・講義室の環境や学修管理システム等のDX環境を整備する。
- F 学生がより理解を深めるために、ライブ録画を推奨し、アーカイブ化する仕組みを構築する。

注1) 本方針は当面、変更しない。ただし、大きな外的変化によっては必要に応じて、その一部を柔

軟に変更することもあり得る。

注2) 授業(予習・復習含む)での学び, 研究室での学び, 正課外での学びのいずれも対象とする。

注3) ネットワーク環境・講義室の整備には時間を要するため, その時点での環境を前提にした新しい教育を導入していくことになる。

オンライン教育を検討するための整理

1. 「学び」の要素（「教え」も同様）

あるべき学び・教えを検討する際には、つぎの観点を考慮する必要がある。

- a. 学びの種類：A. 知識（講義，セミナー等），B. 演習，C. グループワーク・PBL，
D. 実験・実習スキル，E. 研究（実験系・理論系），
F. これらの複合による学び・教え
- b. 学びの方法：授業（予習・復習含む）での学び，研究室での学び，正課外での学び
- c. 学びの場所：キャンパス（大岡山，すずかけ台，田町）内 ↔ 大学外での学び
- d. 学ぶ者：学習者数，多様な学生（熱心・さぼる，仲間になれない，自宅集中型，海外留学中，
社会人，来学しにくい学生（バリアフリー対応）など）
- e. 学びの分野：専門，教養，語学，キャリア，研究など
- f. 学びのレベル：学士・修士・博士のレベル，授業科目の場合 100～600 番台

2. 授業の型ごとの長所・短所の整理

表 授業を例にした場合の各実施形態の長所・短所

	利点	欠点	適した学修例
対面型	<ul style="list-style-type: none"> ・5 感的同調・相互意志疎通 （反応がわかるので、その場で流れの再構築・アドリブ・ジョーク・余裕・余談可） ・教員や受講者間で講義中やその前後での交流による 2 次的な教育効果がある ・個別対応が可能 ・大画面を用いた俯瞰的解説が可能 ・板書を写すことで学修内容が定着 ・研究室選びの参考（先生との相性） 	<ul style="list-style-type: none"> ・時空間的制約あり ・わからなくなると、フォローできない ・多クラスによる場合の教員差 ・繰り返し受講はできない ・板書は、筆記中は話が聞きにくい 	適した学修例
ライブ型	<ul style="list-style-type: none"> ・学習 & 指導の空間的制約からの解放 （遅刻が減る） ・対面とオンデマンドの中間 ・質問しやすい場合あり（仮面の告白） ・大規模学生に対応（スケールメリット） ・ライブ録画可（復習等に利用可） ・投票機能や Google Form による状況把握可 ・遠方の特別講師による授業が容易 ・黒板・スクリーン等が物理的によく見える 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の反応がわからない ・キャンパスでの受講部屋・ネットワーク環境必要 ・さぼる学生（ライブ録画に頼る） ・臨機応変に対応するのが難しい ・大人数での白熱した議論は困難 	<ul style="list-style-type: none"> ・知識型ならば◎ ・必修科目か、意欲のある学生が受講する科目
オンデマンド型	<ul style="list-style-type: none"> ・学習 & 指導の時空間的制約からの解放 （重複で履修できない科目が受講可） ・大規模学生に対応（スケールメリット） ・繰り返し学習が可能 ・ベスト教材の作成（教えの均一化） ・黒板・スクリーン等が物理的によく見える 	<ul style="list-style-type: none"> ・通学制大学としての意義？ ・学生の反応がわからない（一方向になりがち） ・理解度チェックのため、毎回課題や小テストが必須 ・試験の時だけ集中する 	<ul style="list-style-type: none"> ・知識型、特に大規模授業でかつ基礎知識の習得なら◎ ・トピックを限定した内容 ・社会人セミナーなどトップレベルの知識の習得なら◎

	利点	欠点	適した学修例
ハイフレックス型 (対面+ライブ)	<ul style="list-style-type: none"> ・対面型とライブ型で学生の事情に応じて選択可能（海外派遣学生、地方社会人学生など） ・学生の反応を見て授業実施可 ・遠方の特別講師による授業が容易 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠隔側の学生の集中力が低くなる ・教員が両方に意識を向けるのが難しい ・TA、ハイフレックス機材が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・複数キャンパス間での授業 ・2大学間、国際間での交流型の授業
ブレンド型 (対面+ライブ)	<ul style="list-style-type: none"> ・時にブレイクアウトセッションを活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業同士のスケジュールに注意（オンライン授業日に他の対面授業があり、メリットが十分に活かしきれない場合がある） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ある授業だけ特別講師によるライブ型授業（キャンパス内で受講できる設備が必要） ・他大学と合同で実施：対面は各大学で、最終回等の発表会はライブ型授業で実施
ブレンド型 (対面+オンデマンド) オンライン交互型	<ul style="list-style-type: none"> ・工夫によって対面とオンデマンドのいいところ取りが可能 ・オンデマンドで知識（学修者ペースで）修得、対面は演習、発展内容などや質疑による学修で組み立てられる ・適切に設計すれば、教員負担が減る 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業同士のスケジュールに注意（オンデマンドに割り当てられた授業日に他の対面授業があり、メリットを十分に活かしきれない場合がある） ・録画を見ないと対面授業で困る工夫が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・対話・演習型は◎ ・実験型（実験用知識習得含む）も◎ ・大規模授業はオンデマンド型で実施し、TAを使った少人数の対面授業でフォローアップする形式
ブレンド型 (対面+オンデマンド) ハーフ&ハーフ型*	<ul style="list-style-type: none"> ・工夫により対面とオンデマンドのいいところ取りが可能 ・当該授業の知識の差がある場合に、まず基礎を扱うオンデマンドにより知識を同じレベルにし、残りの50分を対面で行う。余る1時限分は補講等を使う ・100分の集中力がなくても受講可 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業同士のスケジュールに注意（オンデマンドに割り当てられた授業日に他の対面授業があり、メリットを十分に活かしきれない場合がある） ・教員負担が増える ・録画を見ないと対面授業で困る工夫が必要 	

*1つの授業時間をたとえば、前半と後半(各50分)に分けて、前半をオンデマンド型、後半を対面型で実施する。